

オリンピックの世界。若い人の活躍が目立つ。

「<sup>しゅん</sup>旬」があるようだ。例えば、例外はあっても、野球選手なら、40代まで人生も、浮き沈み。旬があるように思う。運・鈍・根。

**文字ばかりの本**（250ページ）だが、出版させていただいた。懐かしい、足跡の記録（絶版）。

表紙だけは、大好きな、ポルトガル取材の作品「**カモメと少年**」。



**原点を再確認**の意味で、しかし、人生まだまだ、これからだと、**自己暗示**。

スズメ蜂のような、突発的な出来事もある。先のことはわからないのが、人生かもしれない。

先のことはわからない。しかし、プラス思考で、前進できれば幸い。

第1章だけ、久楽の原点を再確認と、反省のため、読み返し、同時に、  
ご紹介させていただくことにしました。  
縦書きの本ですが、横書きにて。当時のそのままの文言を・・・ 下記は目次、第1章。

人生は、選択と決断の繰り返し。一つの決断、そして旅 \* 13

アラスカ魂に触れる 成田～シアトル～フェアバンクス \* 20

憧れのアラスカ到着 この旅は、自分を試す行脚だ \* 29

北をめざす ユーコン河、スティーブンズビレッジ \* 32

眠れない一夜 不安や恐怖 ストレスは身体に毒 \* 36

アラスカの朝食 自然に囲まれての食事は最高！ \* 43

**蚊の大群出現！** 西北アラスカの入口へ \* 45

ユーコン河の瞑想 \* 49

旬の光を求めて \* 53

幸運のリス君、作品が出来る時、心境と出会いが共鳴！ \* 57

目次には、3 ページに、作者からのメッセージ。

第2章へと、つづく。

# 人生は選択と決断の繰り返し

## ひとつの決断、そして旅

思い返せば、事業廃業という、ひとつの決断をきっかけにして、

芸術家への夢挑戦が始まった。

忘れかけていたもの、心の豊かさを求めた挑戦を機会に、旅人になったのが、

今から、ちょうど14年前のことだった。奥の細道が脳裏にあった。

(初版本・2005年9月15日・16年前)

和紙と共に旅をし、風と会話する。世界の風景を和紙に再現する夢を見てしまった。

以来、訪ね歩いた国は30カ国余、距離にして16万キロ、地球4周。

その土地土地で目にした、優しさと厳しさの両面を見せる大自然は、感動そのものだった。

その限りなき驚異と神秘、その自然環境を相手に営まれる動物との共生。

しかし、人間は、なんと小さな存在なのだろうか、

人ひとり見ることのない大自然の中に、ポツンとひとり立っていると、

そのことを、ひしひしと感じさされる。同時に、心の垢<sup>あか</sup>が、飛び去るのを感じる。

心にしみる感動から、もはや引き返せない。

今回のアラスカ、カナダ北極圏への旅は、どうだろう。

思いが広がる。正直、わくわくしている。

旅立ち前に決めることは、旅の期間と最初と最後の宿の手配だけ。

それにしても、6月、7月と長期間留守にするとすると、出発までのスケジュールは、

殺人的というほど多忙だった。もっとも、これには訳があった。

5年ほど前から開発を手がけていた、特製のしかも寒漉きの古式和紙をキャンバスに、  
顔料と新手法を組み合わせ、「地球の美」を「日本の美」である  
古式和紙に滲み込ませるといふ新しい手法が、ようやくものになり、夢絵と命名して、  
ボストンで発表したところ、大変な好評ををくすることになり、さらなる  
グレードアップへの創意工夫の真っ最中だった。

その上、東京銀座三越百貨店、大阪梅田阪神百貨店の美術画廊での個展が、  
決定しかかっている時だった。さらに、海外での話もあった。  
そんな時に、よりによって約2ヶ月間も、日本を留守するなど、とんでもないことと、  
私の行動に異議を唱える仲の良い友人もいた。

しかし、男が、一度決めたこと。そう簡単には、諦めるわけにはいかない。  
夢絵という新ジャンルに、心魂を吹き込むため、  
アラスカの地に身を置いてみたいというのは、かねてからの念願だった。  
待ったなし、言い訳なし、後悔なし、「できる時にできることを実践」という己の人生訓に  
従っての選択だった。「神様のなされることは予測できないことばかり」  
という言葉がある。この言葉に同感する。

1993年、本格的に海外行脚の旅へと出発した。  
行き先は、北米大陸であるカナダを手始めに、ヨーロッパ各国がターゲットだった。  
どの国も、それぞれ異なった顔を私に見せてくれた。  
脱日常だっただけに、見るもの、触れるものが、実に、新鮮だった。なんとか、  
この感動を記録できないかと、フィルムにスケッチした。  
その時、私にできる唯一の手段だった。

一期一会。夢のような「瞬き」との遭遇。今の心境だからこそ  
見過ごし通りすぎることができない、見える、感じるものが、あった。

スマイル・オン・ミーと、私の微笑みかけてくれる。感度も質も違う。

何かの目的のためという計算も損得もなかった。

道草、風まかせの旅。心と感性が全開している。不自然なものには一切の心や感性が動かない

自然な一瞬一瞬に感性を集中、時を忘れた。身震いするほどの魅力、  
もはや、引き返せない。

今、思うに、人間これほどぜいたくな時間の旅はない。

何も縛られずに、勝手気ままに、世界を旅して回る。ただただ、心の命ずるままに。

そんな心境の旅立ちだった。だから、感性が存分に解放され、

様々な感動が、心に焼きつけられた。

素晴らしい出会いができたのは、神の恵みと幸運が重なったため。

地球ひとり旅という夢冒険が、私を蘇らせた！

ただでさえ芸術家としてのスタートが遅かったのだから、

他の人と同じことをやっていると、駄目と、言い聞かす。夢に、この命まで

とられるかもしれない。それでもよい。好きなことをやれる幸せ。

それまでの会社経営とは異なり、時間は、山ほどあった。

その有り余る時間を、人と会うことに費やした。多くの人に会えば会うほど、

自らの未熟さを知らされた。

それが、私のエネルギー源ともなった。可能な限り、汗を流した。

何万枚というフィルムにスケッチした。

そこには、自然の偽りのない姿があった。私は、自然であることの大切さと、

その難しさの両面を痛感するとともに、すべてにおける、自らの未熟さを痛感した。

まず、私自身が自然体になる。年齢や形、枠にとらわれず、

心を柔軟にして、やりたいこと、やった方がいいことを<sup>きよしんたんかい</sup>虚心坦懐、実践する。

行脚の旅から帰国すると、ビジュアルーツ専門学校に入学した。

そこで表現技術にしぼり、時間を費やした。

一緒に学ぶのは、20歳そこそこの若者だった。彼らと同じ考え、同じペースで、学ぶことは、

不可能だった。しかし、この時間の選択、若者との交流は、

私をよみがえらせる要因になった。年配者としての自覚も、芽生えた。

基本を一通り再確認。マスターしたところで、その専門学校を退学すると、

実践体験を積まないと意味がないと実感し、世界各地を回った。

1回の渡航で、1ヶ月から3ヶ月近く滞在した。

活動の合間を見て、各地の有名な美術館や博物館や劇場を、かたっぱしから訪ね歩いた。

世界の一流の画家や芸術家と身近に接するためだった。

このことにより、私は多くのことを学ぶことになった。本物の素晴らしさを知った。

「本物でなくては意味がない」——これは、世界を旅して知りえた支えの言葉でもあった。

人のいない場所から、人のいない場所へと渡り歩くのだから、旅は危険をともなった。

それは、当然のことだった。それでも、運が味方し、私はなんとか、

ここまで来ることができた。

世界各地への行脚の旅を始めてから、3年後に、

私は初めての個展を京都祇園、クラフトセンターで開催。1996年1月のことだった。

とにかく、芸術家への第一歩を踏み出した。

そして、翌年の京都ホテルオークラ、曲水の間での作品展。

大阪梅田、東京銀座での作品展へと展開。

さて、こうした背景のもと、アラスカ、カナダ北極圏への旅が始まった。

.....

思いつくままに、本を書き写した。誤字、脱字ご容赦。

外出が好きなのだが、京都は、あいにくの雨模様。きっかけは、スズメ蜂。

.....